

ゴーシュはすっかり面白くなって、ますます勢よくやり出しました。「先生もうたくさんです。たくさんですよ。お願いですからやめてください。これからもう先生のタクトなんかとりませんから。」「だまれ。いいところなんだ。これからトラをつかまえる所だ。よく聞いている。」猫は苦しがって、はね上がってまわったり壁に体をくっついたりしましたが、壁についたあとはしばらく青く光るのでした。しまいには猫は、まるで風車のようにグルグルグルとゴーシュをまわりました。ゴーシュも少しグルグルして来ましたので、「さあ、これで許してやるぞ。」と言いながら、ようやくやめました。すると猫もけろりとして「先生、今夜の演奏はどうかしていますね。」と言いました。セロひきはまたしゃくにさわりましたが、気持ちをグッとおさえ、何気ない風に巻タバコを一本出して口にくわえ、それからマッチを一本とって「どうだい、具合を悪くしていないかい。舌を出してごらんよ。」猫はばかにしたように、とがった長い舌をベロリと出しました。「ははあ、少し荒れたね。」セロひきはそう言いながら、いきなりマッチを猫の舌でシュッとすって

自分のタバコへつけました。さあ猫は驚いたの何の、舌を風車のようにブンブンふりまわしながら入り口の扉へ行って頭をどんとぶっつかってはよろよろとしてまた戻って来て、またぶっつかってはよろよろ逃げ道をこさえようとなりました。ゴーシュはしばらく面白そうに見ていましたが「出してやるよ、もう来るなよ。